

〔研究ノート〕

乳児保育における先行研究レビュー

大 方 美 香

Mika Oogata

大阪総合保育大学
児童保育学部

本研究の目的は、乳児保育における指導法を巡る研究における問題意識及び主題の特徴を明らかにすることである。2017年から2022年までの乳児保育に関する研究の中で、題名・研究内容・発表者の観点から、乳児保育研究に関連する論文を選定し、傾向や特徴を精査した。乳児保育の指導法に関連する重要テーマについて継続的傾向を分析した。年度別分析では、初期は乳児保育の制度に関する議論が中心であり、中期以降は教育・保育計画や保育内容等が多く取り上げられたことが明らかとなった。乳児保育の指導法に関する分析では、継続研究や保育者の関りや課題をテーマにしたものが多かった。乳児保育の指導計画では、課題を焦点化し分析していこうとする流れとどの保育施設にもあてはまる課題を取り上げる流れとが見られた。保育者の資質能力は、偏りなく取り上げられており、乳児保育の研究においては欠かせないテーマであることが示された。

キーワード：乳児保育、指導法、生活、指導計画

はじめに

乳児保育（ここでは保育現場における呼称としての3歳未満として位置付ける）における指導法を巡る研究はどのようにおこなわれているのか。問題意識及び主題の特徴について明らかにすることを目的とする。保育学への貢献は、乳児保育における実践を豊かにすることであるが、ねらいをどの文脈からひきだし妥当性を担保していくかは重要である。保育実践における「ねらい」もまた各保育者の判断に任されてきた傾向にある。すなわち、乳児保育の実践構造は、「何を育てる時期なのか」、「保育者はどのような働きかけが必要なのか」という課題意識に基づいて「どのような視点（ねらい）から乳児保育を行えばよいのか」を整理する必要がある。保育の指導法は、援助か指導かがすべてではない。環境を通しての教育を提起されて以来、保育の指導法は、援助か指導かを議論する風土が生まれている。保育は、大人（保護者）と子どもがいてはじめて保育が成立し、どちらかという問題ではない。技能の習得の際には大人が導くことも必要であり、生活の場面においては子ども主体が望ましい。場面や活動の内容、保育の目的・ねらいなどに応じて援助か指導のどちらが適切かを検討しなければい

けないと考える。保育所保育指針（2017）第2章保育の内容に「乳児保育」、「1歳以上3歳未満」が位置づけられるようになった。この改定以降、乳児保育に関する研究はどのように変化しているのかについて検討を行う。

I 乳児保育の特質

論者は、「乳児保育のカリキュラム編成の研究」（大方2018）において、以下の点を指摘してきた。「保育の構造」という概念は、1980年に金田が教育心理学会における自主シンポジウムで「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって－保育の構造と子どもの発達－」を企画している。「乳児期の研究は、分野別の研究が多く、関連性や統合性を重視した研究が少ない。乳児期の研究を『乳児保育』においてみようという方向は、まさに、この関連性、統合性をはかる乳児研究の方法であると考えられる」と提案している。

乳児保育は重要な役割を担っており、近年、乳児保育の研究が関心を持たれて多岐にわたる研究がなされている。一例を挙げれば、安全・安心をしっかりと確保することの重要性をふまえた保護者サービス論など福祉の観点からの研究（柏女2008）、乳児の育ちの重要性を念頭に置いた生理学的・医学的な観点からの研究（小西2009）、さらには、子どもの発達心理学的な観点からの研究（上村・七木田2008）などがある。

しかし、こうした多様な研究は、保育所における保育

実践・保育内容編成の方向付けという中心課題そのものは研究されていない現状がある。保育実践・内容編成につながる研究としては、保育士養成校における「乳児保育」科目の内容・方法の調査研究が多く累積されている。例えば、乳児保育の授業内容項目では、船越（2010）による『『乳児保育』授業における課題：保育所実習アンケート分析から』や古橋・安井（2012）による『『乳児保育』の授業研究（1）予習重視のグループ討議と講義内容』などが授業研究である。その中で、船越（2010）は、「保育所実習で経験した保育内容についてアンケート調査を行い、実習前の『乳児保育』講義・演習を実習に即した授業展開、また、実習終了後は実習での経験を活かし、理論と結び付けていくためには、どのようにすれば教育効果があがるかを検討するために、実習で経験した保育内容」を明らかにしている。また、乳児保育の実践項目では、萩尾（2010）による「保育者養成校における『乳児保育』の意義と理解－わかる授業をめざして－」や森田・井上（2009）による『『乳児保育』担当保育士の資質と養成機関の課題－乳児保育担当への不安と『学・職』連携教育による充実』などが見られる。こうした研究は、養成校の授業内容から保育実践に迫るとも言えるが、保育実践・保育内容の編成から言えば、間接的な研究となっている。「乳児保育」の教科書を検討した西村（2010）は、「保育士と子どもの愛着関係や相互関係、子どもの発達、保育環境や乳児保育の方法・手技に関する研究は一定数認められたが、乳児保育の体系や構造についての先行研究は検出されなかった」と指摘している。保育士養成における乳児保育の授業内容の研究が成果を挙げるためにも、保育実践の内容・構造を明らかにする必要があるといえる。乳児保育の内容編成・実践につながるものもいくつかある。それらの研究は、乳児保育の領域に焦点を当てている。例えば、「乳児の人権保育実践」（玉置 2010）、「食の援助」（梶・神崎他 2003）、「食援助プログラム」（松生 2007）、「仰向け寝」（中井他 1999）に焦点を当てた研究や、「乳児の運動遊び」（黒岩・青山 2004）、「乳児の絵」（塩川 1997）、「乳児の絵本読み聞かせ」（福岡・磯沢 2007）という個別の課題から乳児保育の方向を示唆している研究がある。また、「1、2歳児の実践」（松本 2008）、「乳児の遊び」（三好・石橋 2006）、「乳児の保健」（松本 1997）、「乳児の一時預かり事業」（千田・上田・工藤 1992）などがある。これらの蓄積は貴重であるが、乳児保育の実践がどうあるべきかという中心課題には言及していない。実践に切り込もうとして興味深いものとしては、「子どものこだわりに寄り添う保育に貫かれる子ども理解と受容」（橋川 2005）がある。また、個別性から広げ

た発想では、「保育者－子どもの相互関係が親子関係に与える影響」（吉葉他 2001）など、子どもの主体的活動を保証する保育とは何かを検討した研究があり、保育の中に隠された価値観の検討（シルヴィーレイナ他 2002）などがある。いずれにしても、乳児保育の構造をどのように考えるかは、やはり主たるテーマとなっていない。土方（2000）は、保育内容編成の視点も考慮して検討している。また、横松ら（2007）は、「保育全体を構造的にとらえることは、保育者の役割や指導性を明確にすることにつながり」と述べ、保育者が「自らの願う経験も考え直しつつ保育内容構造論として構築・再構築していくことが重要である。それが可能になれば、保育者の役割や指導性を明確にする議論も必要なくなり、愛情と共に知性の磨かれた保育者の保育実践が期待できるのではなかろうか」といっている。さらに、光本（2000）も研究の現状として「保育実践全体を構造的にとらえようとしているが、乳児保育には言及していない」と評価している。

質問紙調査による先行研究では「保育所における指導計画作成に関する実態調査」（三好 2012）の1件が検索された。この調査結果では、「指導計画の必要性については、保育士の50%がとても必要、42%がまあまあ必要、合わせると約9割の保育士が必要であると感じていることがわかった。一方、必要と思わない保育士も1割いることがわかった。また、指導計画における困り感や悩みは約6割の保育士が持っており、書き方に関することが最も多く、次いで保育の内容や理解である（同 p.169）」と述べ、「適切なねらい」を立てる必要性が記載されていた。また「ねらいを立てる際はまず子どもの実態をとらえ、子どもに育つことが期待される心情・意欲・態度は何かを読み取りねらいとして明確に打ち出し、保育の方向性や内容を決めていく。～子どもの実態をとらえきれず方向違いのねらいを立てたならば、子どもの育ちを支えることはできない（同 p.173）」と書いている。

この問題意識は、横松ら（2007）が「保育全体を構造的にとらえることは、保育者の役割や指導性を明確にすることにつながり、現実の保育所・幼稚園において豊かな指導をより確実に実現する上で必要であると考えられる。今日、豊かな指導をより確実に実現する志向性が強まっているといえ、そのための理論的研究は、筆者らも重要であると考え」と述べ、「保育者が自らの願う経験も考え直しつつ保育内容構造論として構築・再構築していくことが重要である。それが可能になれば、保育者の役割や指導性を明確にする議論も必要なくなり、愛情と共に知性の磨かれた保育者の保育実践が期待できるの

ではなかろうか」といっていることから理解される。さらに、光本（2000）も研究の現状として「保育実践全体を構造的にとらえようとしているが、乳児保育には言及していない」と評価している。

II 乳児保育に関する先行研究検索（2017年以前）

乳児保育に関する先行研究検索（2017年以前）は、大方（2018）が「乳児保育のカリキュラム編成の研究」において調査しまとめている。当時、我が国の乳児保育に関する先行研究は「乳児保育」と検索すれば cinii では 546 件該当したが、その大半が雑誌的傾向のものであった。

本論文の内容に近いものを検索した結果は、以下に示すように、「保育構造」に関する研究の視点、「実践構造」「保育」に関する研究の視点、「保育課程」に関する研究の視点、「指導計画」「保育」に関する研究の視点、「保育所保育指針」「乳児」に関する研究の視点と分類できた。

「保育構造」に関する研究の視点では、当時 10 件検索できた。例えば、光本（2000）『『保育構造』論についての一考察 教育学研究紀要 46（1）、626-631』では、保育実践を分析し再構築するいくつかの観点を明らかにしている。また、保育内容・方法の変遷とともに実践の課題に応える形で構築されてきた「保育構造」論の内容とその視点について整理し、保育を構造化する意味について考察する。同時に、保育者の指導性の矮小化、保育者の指導と子どもの自主活動との変更をとどめる可能性をも含んでいることを忘れてはならないと指摘している。横松、浅野、近行他（2007）「これからの保育構造論構築に関する一考察 岡山大学教育学部研究集録（136）、103-110」では、保育の知識とともに人間として望ましい文化や人の育ちの家庭に関する知識を得る「環境を通しての教育」を充実させるうえでの保育構造論への注目、保育構造論批判の分析と検討、保育構造論の衰退に関係すると考えられる座談会記録の再分析と再検討を行っている。保育者は、保育そのものに関する知識とともに、人間として望ましい文化や人の育ちの過程に関する知識も積み重ね、知性を磨くことが必要で、同時に保育内容構造論を構築・再構築することが重要である。保育者の願いとその構造化についての追究を深めることになる保育内容構造論構築は、実践において子どもに寄り添う形でなければならないことに留意するとしている。

「実践構造」「保育」に関する研究の視点では、4 件検索できた。例えば、大方、小寺、玉置（2013）「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育

研究その 1－大阪総合保育大学紀要（7）、67-94」では、乳児保育、指導計画の編成、保育所保育指針、保育学、保育実践の全体的構造について検討するため、保育所保育指針がどのような乳児保育の実践構造を予定しているのかを検討している。1965 年と 2008 年の保育所保育指針を比較・検討する「二つの指針の違い」は、指導計画編成の重点を「主体的活動」か「望ましい活動」、及び、「目標・ねらい」か「内容・活動」かによって生じること、この重点のおき方が実践構造の違いを生み出していることがわかったとしている。指導計画実践の調査や外国の乳児プログラムの検討も必要であるとしている。

「保育課程」に関する研究の視点では、23 件検索できた。例えば、宍戸（2010）「保育カリキュラム〔保育課程〕について考える－保育カリキュラムの構想 保育の研究（23）、1-8」では、エングダール氏提案の「自然を起源とする子ども」「文化と知識の再生産としての子ども」「文化と知識の創造者としての子ども」という 3 つの「子どもの見方」に、保育カリキュラムを構成していくうえでどう考えたらよいのかを指摘し、現在の日本の保育カリキュラムの見方 3 つ（「環境構成型－自由遊び型－」「設定保育型－ねらい達成の領域型－」「プロジェクト型－主題・探求型－」）をエングダール氏の「子どもの見方」3 つに対応させている。田中（2010）「幼児教育カリキュラム・シフトの位相とパラダイム－教授－学習過程の可視化への試み－ 京都文教短期大学研究紀要 49、60-66」では、幼児期の教育・保育実践の展開を基礎づけるカリキュラム構成の構造枠と構造概念、カリキュラム・シフトの位相と視座を明確にすることを指摘している。①「教育課程・保育課程」を示し、マクロ的な面からそれぞれの実践的な受けとめの視座を明らかにする。②教育課程・保育課程に基づく実践展開過程に照準を置いて、ミクロ的な面から実践の生成的位相と操作概念について明らかにする。③「教育課程」「保育課程」としてのカリキュラムは「基盤のカリキュラム」「指導計画」「教育・保育資源」から構成される。④園内にとどまらず地域の環境を教育・保育の資源として利活用する。様々な「もの」「人」「こと」が有意義な教育・保育資源となる。⑤カリキュラムは記述されるのみならず、生成される日常的な教授－学習過程であり実践的な展開の基礎をなす。⑥カリキュラムの実践的な展開には、子どもの育ちにつながる責任制の視点からは、高まりとしての位相が想定される。⑦カリキュラムの位相は、「経験的情況」として 4 つの生成過程をたどる実践展開である。⑧それぞれの位相への返還には、「知性化」「情動化」「協同化」が媒介要因となり、教授－学習過程の質

を高めていく。⑨保育者により「知性化」「情動化」「協同化」が計画的・意図的に操作されて、カリキュラムの位相の返還が進められる。⑩カリキュラム位相をたどる教授－学習過程は、遊技的な探求過程であり、互いの生活を基盤にした教育・保育では、コミュニケーションの生成・成熟の過程であることを述べている。そのためには、①「活動」→「体験」→「経験」に高まっていくそれぞれの概念把握 ②「指導」「援助」「支援」「配慮」のそれぞれの概念と包含関係の把握 ③「ねらい」及び「内容」、これらから想定される具体的な「目標」の概念把握 ④「素材」→「材料」→「教材」への教育的意味を有していく「概念把握」が必要であると結論では指摘している。

「指導計画」「保育」に関する研究の視点では、16件検索できた。例えば、田中、金丸、永渕（2012）「保育雑誌に掲載される年間指導計画モデルの分析と評価 教育実践研究（20）、155-161」では、代表的な雑誌モデルを詳細に分析することによって、雑誌モデルの問題点を明らかにし、あるべき年間計画について考察している。「ひかりのくに」特別付録「新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針に配慮した年齢別年の計画」から3.4.5歳児を分析している。保育雑誌の年間指導計画モデルを参考にして作られる多くの園の年間指導計画には多くの問題点を指摘することができ、年間指導計画が日々の現実の保育の原点となり、確かな保育のもととなる計画となるためには多くの点で改善していく必要がある。保育雑誌にはいくつかの問題点があるが、これらの中から必要と思われる項目を各園が独自に追加・選択し、具体的な内容を用意した年間指導計画が作成されなければならないと指摘している。

「保育所保育指針」「乳児」に関する研究の視点では、6件検索できた。例えば、玉置哲淳（2010）「乳児の人権保育実践展開の視点と目標（試論） エデュケア 30、1-20」では、乳児の人権保育の視点とその保育目標を提示すること、育てるべき人権行動を「ヒトとしての値打ちを認める行動」として理解する。この立場から乳児保育における人権保育について保育所保育指針を検討している。指針では、ヒトとしての値打ちを認める行動を育てる視点が不明確であり、具体的な内容が表示されていないことが明らかとなった。二つ目に、ヒトとしての値打ちを認める行動を軸にした理論的枠組みを検討し、乳児の人権保育実践の視点と目標を年齢区分ごとに人権保育の目標のリスト試案を提示した、理論上新たな提案であり、様々な議論を踏まえて整理されることが必要であると述べている。

Ⅲ 乳児保育に関する先行研究検索（2017年～2022年）

近年、乳児保育の研究が関心を持たれて多岐にわたる研究がなされている。本研究では、乳児保育に関する研究が、保育所保育指針（2017年）第2章保育の内容に「乳児保育」、「1歳以上3歳未満」に位置づけられて以降どのように変化しているのかについて検討を行う。その為、2017年～2022年における乳児保育に関する先行研究検索を行う（表1参照）。

乳児保育に関する保育系における発表論文・大会発表（2017年～2022年）において、「乳児（0.1.2歳児含む）」とタイトル表記、もしくは乳児と捉えられるもの」は、全体として939件であり発表件数は増加している。しかしながら、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」は90件（9.6%）、「本文より乳児の指導法と捉えられるもの」は29件（3.1%）といまだに少数であることがわかる。

内訳として、我が国の乳児保育に関する先行研究は、『保育学研究』・『乳幼児教育学研究』といったジャーナルにおいて、「乳児（0.1.2歳児含む）」とタイトル表記、もしくは乳児と捉えられるもの」を検索すれば18件該当するが、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」6件（33.3%）、「本文より乳児の指導法と捉えられるもの」3件（16.6%）であり、半数が指導法に関するものであることがわかった。科研費は、「乳児（0.1.2歳児含む）」とタイトル表記、もしくは乳児と捉えられるもの」を検索すれば15件該当するが、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」4件（26.6%）、「本文より乳児の指導法と捉えられるもの」は散見されなかった。

一般社団法人日本保育学会（2017年～2022年：第71回大会～第75回大会）において、「乳児（0.1.2歳児含む）」とタイトル表記、もしくは乳児と捉えられるもの」を検索すれば186件が該当するが、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」44件（23.6%）、「本文より乳児の指導法と捉えられるもの」内容から指導法と分かるものは12件（6.4%）であり、3割程度といえる。

論文検索（google scholar）「乳児保育」、「指導法」では、「乳児（0.1.2歳児含む）」とタイトル表記、もしくは乳児と捉えられるもの」を検索すれば5600件が該当する。しかしながら、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」7件（0.1%）であり、「本文より乳児の指導法と捉えられるもの」4件（0.7%）とごくわずかである。

論文検索（google scholar）「乳児保育」、「援助」では、

表1：乳児研究内の指導法の割合（2017年以降）

検索枠	乳児（0.1.2歳児含む）とタイトル表記、もしくは乳児と分類されているもの	表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの（1次スクリーニング）	本文より乳児の指導法と捉えられるもの（2次スクリーニング）
保育学研究 乳幼児教育学研究	18（100%）	6（33.33%）	3（16.67%）
科研費	15（100%）	4（26.67%）	0（0%）
保育学会大会 71 - 75 回大会※ （口頭・ポスター発表）	186（100%）	44（23.66%）	12（6.45%）
論文検索（google scholar） 「乳児保育」and「指導法」でヒット	5600（100%）	7（0.13%）	4（0.07%）
論文検索（google scholar） 「乳児保育」and「援助」でヒット	3580（100%）	29（0.81%）	10（0.28%）
総計	9399（100%）	90（0.96%）	29（0.31%）

※第71 - 75 回大会の発表においては2次スクリーニングも表題からのスクリーニングとなる

表2：分類名と年度のクロス表

	2017	2018	2019	2020	2021	2022	合計
保育制度	1						1
教育・保育計画	1					1	2
保育者養成			1	1			2
保育方法	8	5	7	4	3	2	29
保育環境	4	1	1			1	7
保育内容	8		7	4	3	1	23
乳児保育	2	4	5	5	3		19
保育思想		1					1
発達論・児童文化	2	2	1			1	6
合計	26	13	22	14	10	5	90

「乳児（0.1.2歳児含む）とタイトル表記、もしくは乳児と捉えられるもの」を検索すれば3580件が該当する。しかしながら、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」29件（0.8%）であり、「本文より乳児の指導法と捉えられるもの」10件（0.2%）とわずかである。

表1に示す通りである。

Ⅳ 乳児保育の発表分類名と年度推移検索（2017年～2022年）

次に、表1における「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」90件について詳細を検討してみる。保育の研究者が複数で年度別に、題目、研究内容、発表者の観点から、乳児保育における問題提議に関連すると考えられる発表・論文を選定し、傾向や特徴を精査した。表2に示すように、一般社団法人日本保育学会論文集の発表区分に従って論文をカテゴリーに分類した。「シンポジウム0件」、「幼保一体化0件」、「資質・能力

0件」、「障害児保育0件」、「家庭地域との連携0件」であり表2からは削除している。全体としては、「保育制度1件」、「教育・保育計画2件」、「保育者養成2件」、「保育方法29件」、「保育環境7件」、「保育内容23件」、「乳児保育19件」、「保育思想1件」、「発達論・児童文化6件」であった。保育方法、保育内容、乳児保育の順に項目が多いことがわかる。

年度推移では、「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」90件のうち、2017年が一番多く26件、次いで2019年22件、2020年14件、2018年13件、2021年10件、2022年5件である。この2年間はコロナ禍であり、大会発表等の減少もあり一概には言えないが、2017年の保育所保育指針改定当初は、タイトルから指導法と思われる発表が多かったことが推測できる。

Ⅴ 乳児保育に関する先行研究リスト

次に、表1における「表題及び抄録より、乳児の指導法と捉えられるもの」90件について詳細を検討した結

果が表2である。表2では、一般社団法人日本保育学会論文集の発表区分に従って論文をカテゴリーに分類した。ここでは、そのカテゴリーごとにどのような研究がなされているのかについて考察する。

1 「保育制度」に関する研究の視点（表3-1）

「保育制度」に関する研究の視点（表3-1）では、1件検索できた。

例えば、井上（2017）「保育所保育指針（2017年版）からみる乳幼児保育における愛着形成に関する支援 鹿児島純心女子大学院紀要」では、保育内容・方法の変遷とともに実践の課題に応える形で構築されてきた「愛着」論の内容とその視点について整理し、保育を構造化する意味について考察している。

2 「教育・保育計画」に関する研究の視点（表3-2）

「教育・保育計画」に関する研究の視点（表3-2）では、2件検索できた。

例えば、大方（2017）「乳児保育のカリキュラム編成の研究 博士学位請求論文」では、乳児保育、指導計画の編成、保育所保育指針、保育学、保育実践の全体的構造について検討するため、保育所保育指針がどのような乳児保育の実践構造を予定しているのかを検討している。1965年と2008年の保育所保育指針を比較・検討する「2つの指針の違い」は、指導計画編成の重点を「主体的活動」か「望ましい活動」、及び、「目標・ねらい」か「内容・活動」かによって生じること、この重点のおき方が実践構造の違いを生み出していることがわかった

としている。新井（2021）「乳児の育ちを捉えた個別指導計画 第75回日本保育学会大会ポスター発表」では、乳児保育における個別性に言及し保育所保育指針「乳児保育」で示された3つの視点が必ずしも生かされていないことを指摘している。

3 「保育者養成」に関する研究の視点（表3-3）

「保育者養成」に関する研究の視点（表3-3）では、2件検索できた。

例えば、漁田、塩川、酒井、宮地、佐藤、日隈（2019）「保育者の資質向上と評価方法（Ⅳ）-3歳未満児保育における課題の解決策-」では、3歳未満児保育を実践する上での課題と子ども理解についてどう考えたらよいのかを指摘し、現在の日本の保育者養成の課題を検討している。羽根、加藤、島田、長尾（2020）「小規模保育事業における保育者の実践的知識に関する研究 第74回日本保育学会大会ポスター発表」では、待機児童解消等により増加した小規模保育事業であるが、保育実践の展開を基礎づけるカリキュラム構成の構造枠と構造概念を明確にすることを指摘している。小規模保育事業では、特に、様々な「もの」「人」「こと」が有意義な保育資源となる。小規模保育事業における保育実践は、3歳未満児であり、従来の保育者養成とは異なる視点が求められることを指摘している。

4 「保育方法」に関する研究の視点（表3-4-1・表3-4-2）

「保育方法」に関する研究の視点では、29件検索でき

表3-1：「保育制度」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	鹿児島純心女子大学大学院紀要	2017年告示保育所保育指針からみる乳幼児保育における愛着形成に関する支援 ○井上祐子

表3-2：「教育・保育計画」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	博士学位請求論文 大阪総合保育大学	乳児保育のカリキュラム編成の研究 ○大方美香
2021	第75回日本保育学会大会 ポスター発表	乳児の育ちを捉えた個別指導計画 ○新井明子

表3-3：「保育者養成」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2019	第73回日本保育学会大会 ポスター発表	保育者の資質向上と評価方法（Ⅳ）-3歳未満児保育における課題の解決策- ○漁田俊子、塩川寿平、酒井範子、宮地由紀子、佐藤寛子、日隈美代子
2020	第74回日本保育学会大会 口頭発表	小規模保育事業における保育者の実践的知識に関する研究 ○羽根由美子、加藤信子、島田郁世、長尾美佐子

た。2017年は8件と一番多く発表されている。2018年は5件、2019年は7件、2020年は4件、2021年は3件、2022年は2件である。ここでは、29件を表3-4-1:「保育方法」に関する研究の視点(保育学会大会発表)と表3-4-2:「保育方法」に関する研究の視点(論文)に分類して考察する。

表3-4-2:「保育方法」に関する研究の視点(論文)では、論文の目的・方法・結果といった内容についてふれてみた。研究方法は、調査研究及び質的研究、事例検討と多様であることがわかった。目的は、例えば、大方(2017)「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その3ー 大阪総合保育大学紀要」では、乳児保育の実践構造を解明するために、指導計画のねらい編成に焦点をあて、4つのタイプから実践構造の実態に迫っている。2018年にもその継続研究で大方(2018)「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その4ー 大阪総合保育大学紀要」が出されている。「指導、援助、支援、配慮のそれぞれの概念把握と包含関係の把握」、「子ども理解、目標、ねらい及び内容、保育者の配慮、評価」の視点、「活動、体験、経験へと探究していく過程」への視点等、課題と展望について考察している。清水、片山(2017)「事例から見た乳児の『泣き』に対する保育士の理解と対応 岡山大学教師教育センター学術成果」、佐々本、大方(2018)「乳児保育における保育者との関係性(Ⅲ)ー保育記録を基にした乳児の『泣く行為』の月別内容分析ー 大阪総合保育大学紀要」では、乳児の「泣く」行為に対する保育者のかかわりについて言及し

ている。乳児保育の指導法に関する内容の詳細分析は今後の課題とする。

中山(2017)「乳児担当制において考慮すべき保育士の対応 第71回日本保育学会大会口頭発表」、土田(2020)「乳児保育における担当制の類型と保育プロセスの検証 博士論文 西南学院大学」は、乳児保育における担当制について言及し、担当制により保育者の関わりは変容するのかについて言及している。

石丸、本山(2019)「ある乳児保育担当者における困難感とその対処の過程 第73回日本保育学会ポスター発表」、星野(2019)「乳児保育における視線の持つ意味ー0歳児クラスを対象にー 第73回日本保育学会大会口頭発表」、菊池(2019)「乳児保育における個性と職員の協働性について 文教大学教育学部教育学部紀要」、中山(2019)「乳幼児の発達と保育者の関わりについて:2歳児事例からの考察 大阪樟蔭女子大学研究紀要」、水野、中坪(2021)「乳児に対する保育者のアプローチとしての『背中の保育』 乳幼児教育学研究第30号」、今村、佐藤(2022)「乳児クラス担当者は子どもの声・子どもの遊びをどう捉えているのか:子どもの主体的行動から子ども理解の視点を探る 神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究」等は、乳児保育における保育者の関わりについて、各々の視点から論考している。

ようやく乳児保育における保育者の関わりに視点が当たったようになったことは評価すべきであるが、大会発表が多いこともあり、断片的なとらえ方が多く抜本的論理構成には至っていないといえる。

表3-4-1:「保育方法」に関する研究の視点(保育学会大会発表)

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	なぜ保育者は乳児に対して背中を用いてアプローチするのか?ー「背中の保育」の意義と課題ー ○水野佳津子、中坪史典
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	乳児担当制において考慮すべき保育士の対応 ○中山あき
2017	第71回日本保育学会大会 ポスター発表	子どもの葛藤場面において、保育者が寄り添えた/寄り添えなかったと感じるのはどのようなときか? ○上中尚子、保木井啓史
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	乳児の遊び環境と保育者のかかわりー2歳児の保育観察からー ○伊藤美保子、西隆太郎、宗高弘子
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	乳幼児が保育者を「見る」ことの意味ー0歳児クラスの参与観察を通してー ○高野美千絵
2017	第71回日本保育学会大会 ポスター発表	乳児院保育者の「遊び観・保育観」変容のプロセス ○齋藤政子
2018	第72回日本保育学会大会 ポスター発表	身近な人と心が通じ合う保育を考える ○村松裕平、高木都奈子
2018	第72回日本保育学会大会 ポスター発表	10の姿につなぐ乳児保育での保育者のかかわり方について ○爾寛明
2018	第72回日本保育学会大会 ポスター発表	1歳児の遊びを支える保育者の援助に関する研究 ○西垣直子、西垣吉之

乳児保育における先行研究レビュー

年	発表区分	タイトル・研究者
2019	第 73 回日本保育学会大会 口頭発表	乳児保育における視線の持つ意味－0 歳児クラスを対象に－ ○星野優芽
2019	第 73 回日本保育学会大会 ポスター発表	ある乳児保育担当者における困難感とその対処の過程 ○石丸るみ、本山方子
2019	第 73 回日本保育学会大会 ポスター発表	エモーションナルコントロールを育てる子ども集団のあり方 ○爾寛明、藤本和寿、藤森平司
2020	第 74 回日本保育学会大会 口頭発表	初任保育者の乳児を捉える視点の変容と要因を探索（1）－計量テキスト分析からの検討－ ○中川愛、山口香織
2020	第 74 回日本保育学会大会 口頭発表	0 歳児クラスにおける子ども－保育者間の視線－会話分析の手法を用いた実証的検討－ ○星野優芽
2021	乳幼児教育学研究第 30 号	乳児に対する保育者のアプローチとしての「背中の保育」 ○水野佳津子、中坪史典
2021	第 75 回日本保育学会大会 ポスター発表	乳児クラスを担当する保育士の保育行為スタイル－ELAN による保育行為の分析－ ○永井久美子、香曾我部琢、渡辺俊太郎
2021	第 75 回日本保育学会大会 ポスター発表	保育者の子どもとの関わりについての悩み－3 歳未満児保育と 3 歳以上児保育における違いを 探索－ ○小山朝子

表 3－4－2：「保育方法」に関する研究の視点（論文）

年	発表区分	タイトル・研究者	内 容
2017	大阪総合保 育大学紀要	保育所保育指針 における乳児保 育の実践構造の 検討－乳児保育 研究 その 3－ ○大方美香	<p>●目的 乳児保育の実践構造を解明するための継続研究。乳児保育における指導計画作成のねらい編成に焦点をあて、4 つのタイプから実践構造の実態にせまる。●方法 保育者への質問紙調査 412 名、うち乳児担当者 274 名（66.5％）0）属性に関する項目、1）指導計画の書式（質問 1、園で作成している年間指導計画・月間指導計画などの書式について調べる。）、2）年間指導計画のねらい編成方法（質問 2）、3）月間指導計画のねらい編成方法（質問 5）、4）保育の振り返りについて（質問 6、4 つのタイプは、保育の振り返りにおいてどのように選択されているのかを調べる）、全て選択形式で回答を分析。</p> <p>●結果 保育課程・年間指導計画・月間指導計画・週案・個別指導計画は 80％以上作成されていることがわかった。次に、年間指導計画において、ねらい編成の視点から検討を行った。D タイプ（子ども主体重視）が 90％、C タイプ（ねらい重視）が 80％以上であることがわかった。活動からねらいをたてる A・B タイプ（活動重視）は、約 60％ずつ 2 つに分かれた。ねらいの編成方法には 4 つのタイプがあり、保育現場の交錯した状況や乳児保育は多様なタイプを選択していることが示唆された。月間指導計画においても、ねらい編成の視点から検討を行った。D タイプが 88.6％と多数であることがわかった。年間指導計画におけるねらいの編成と同じ傾向が示された。A・B タイプ（活動重視）は、内容からねらいをたてる A タイプ 63.6％、活動からねらいをたてる B タイプ 71.6％に分かれた。C タイプは 60％以上において領域や心情・意欲・態度などからねらいをたてていることがわかった。「保育の振り返り」については、年間指導計画、月間指導計画のどちらも、D タイプが 80％と多数であり、C タイプが 56.3％という傾向が示された。以上、質問紙調査結果より、乳児保育の実践構造は 4 つのタイプが混在しているとわかった。</p>
2017	岡山大学教 師教育開発 センター紀 要	事例から見た乳 児の「泣き」に 対する保育士の 理解と対応 ○清永歌織、 片山美香	<p>●目的 ①0 歳児クラスの子どもの泣きと保育士の対応の実態を明らかにする②泣きへの保育士の対応から、乳児保育における子ども理解と発達援助のあり方について考察する。</p> <p>●方法 短期縦断的な保育実践場面の観察 乳児 10 名、保育士 2 名。●結果 「泣き」が生じた背景について検討したところ、5 種類に分類された。生理的状态や他者との関係を含む心理的状态、時間帯等によって「泣き」が生じていることがわかった。保育士は、「泣き」を生じさせた負の心情を全面的に受け止めて共感するとともに、正の心情への改善に努めることが子どもと信頼関係を築く機会にもなっていると捉えていた。さらに、信頼関係が深まってくると負の心理的状态を子ども自身が主体的に制御しようとする姿が見られるようになることに加えて、「泣き」の質の変容が認められることが明らかになった。</p>
2018	大阪総合保 育大学紀要	保育所保育指針 における乳児保 育の実践構造の 検討－乳児保育 研究 その 4－ ○大方美香	<p>●目的 乳児保育の実践構造、すなわち乳児への働きかけの構造を解明する。●方法 ヒアリング調査。対象保育者は、近畿圏民間保育園 21 園（各 4 名）、3 歳未満児担当の保育者 82 名。日々の日案において、何を乳児保育の軸として実践しているのかを知る。●結果 4 つのタイプ（①単純活動モデル、②望ましい活動重視モデル、③ねらい重視モデル、④主体重視モデル）が乳児保育の実践構造の質的検討をするためには有効な分類であること、特に、乳児の生活における子どもと保育者の内的側面についての客観的な分析によって、乳児保育の実践構造の適切性を検討することが示された。</p>

年	発表区分	タイトル・研究者	内 容
2018	大阪総合保育大学紀要	乳児保育における保育者との関係性(Ⅲ)－保育記録を基にした乳児の「泣く行為」の月別内容分析－ ○佐々本清恵、大方美香	●目的 「乳児の泣く行為の意味」とそれに関わる「保育者の役割」を明確にする。●方法 乳児10人の保育記録から泣く行為の記述を取り出し、取り出した事例を9種のカテゴリーに分類し、クラス集団における月別の内容分析。●結果 クラス集団においても、乳児の泣く行為には月ごとの内容に特徴があった。その特徴としては、①どの月においても「保育者との関わり」は「乳児の泣く行為」と深く結びついていた②「保育内容」と「乳児の泣く行為」には関わりがあった③月齢による泣く行為の変化と同じように、クラス集団としての泣く行為にも1年を通じて変化があった④ともだちの存在が泣く行為に影響を与えていた⑤月齢の近いグループには、グループそれぞれの特徴があった等が分析考察された。そのことから、クラス集団においても、保育内容等が、乳児の泣く行為に大きな影響を与えることを踏まえ、「保育者の関わりの重要性」が指摘された。
2019	保育学研究	乳児保育における葛藤の意義－乳児と保育者の相互作用に着目して－ ○本岡美保子	●目的 乳児が葛藤によって不快情動を表出し、それが保育者の葛藤を生むと共に情動の不安定さも露呈したエピソードにおいて、互いの葛藤がもたらす情動の機微と関係性の変容を検討することを通して、乳児保育における葛藤の意義を示すこと。●方法 保育中に乳児が不快情動を表出した時、わらべうたで関わりながら「私」が把握したことを、保育後速やかにメモや動画などで確認しながら、エピソード記述として記述。120例を、筆者の経験から切り離すために1年以上置いた後、もう一度読み返し、読み手としての筆者にとっても「心が揺さぶられた」2例と、潜在的な葛藤状態であった乳児と「私」の葛藤や、互いの葛藤と関係性の変容が描かれていた2例を抽出し、分析する。●結果 葛藤は、関係性を基盤とした乳児保育には必然的に現れ、2つの意義を持つと考えられる。1つめは、乳児の保育者への愛着を形成することである。2つめは、保育者の乳児への志向性を高めることである。葛藤の意義を生かすためには、保育者が乳児の身体性に対する感受性を高め、乳児を間主観的に把握しようとし続けることが重要だろう。
2019	東京未来大学研究紀要	乳幼児の遊びの始まりに関する研究－0歳児クラスの事例から－ ○浅井かおり、浅井拓久也	●目的 乳幼児の遊びの始まりに着目をして、0歳児クラスの子どもは何をきっかけに遊びを始めるのか、どのようなプロセスを辿って遊びを始めていくのかを明らかにし、乳幼児理解につなげる。●方法 0歳児クラスの参与観察を行い、ビデオ撮影した映像を基に、複線経路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model)を用いて、遊びが始まるまでのプロセスを可視化し検討。●結果 遊びを始める前には、人を見るというパターンがあることを見出した。人を見るという行為は単に人を観察しているのではなく、そこには確認・安心、興味、要求の意味や子どもそれぞれの思いがあることが推察された。そのため、保育の中では乳幼児がどのように遊んでいるか、何に興味を持ち遊んでいるか等の遊びの内容だけを捉えるのではなく、視線や遊びの始まりに着目することで、自発的に遊びを始める乳幼児の姿を捉えることができることを示した。
2019	「教育学部紀要」文教大学教育学部	乳児保育における個性と職員の協働性について ○菊地知子	●目的 一人一人を大切にしつつ、チーム性を発揮して保育を行うとはいかなることか。●方法 事例研究。●結果 一人一人の育ちに応答的に関与していくためには、職員がチームで当たり協働性を発揮していくことが不可欠であるという個性性と協働性の相互性についての試論を展開。
2019	大阪樟蔭女子大学研究紀要	乳幼児の発達と保育者のかかわりについて：2歳児事例・4歳児事例からの考察 ○中山美佐	●目的 子どもの人間関係や保育者と子どもがかかわる中で生まれる愛着について考察する。●方法 事例研究。●結果 保育者は子どもを観察し、子どもの気持ちを汲み取り、寄り添いながらも、子どもが健やかに育つように考え、時には環境を変えたり、言葉かけを変えたり試行錯誤しながら子どもと向き合う必要があると考えられる。保育者は個々の発達の違いを理解しながら、また、個々の家庭の違いを観察しながら何度も振り返り、子どもの育ちに役立てる立場でなくてはならない。子どもにとって安心の基地、心の居場所であることは必要だと考えられる。
2020	博士学位請求論文	乳児保育における担当制の類型と保育プロセスの検証 ○土田珠紀	●目的 保育者と子どもの日々の営みがより豊かなものとなり、人の生涯にわたる幸福を支える力となる非認知的能力を育むために、園児数や保育室の面積・数などの物理的条件に拠らない保育の構造が検討できないか探る。●方法 参与観察。対象3保育所、観察時期は7月～10月に1人の保育者あたり2回ずつの観察を行った。尚、観察時間帯は、観察対象保育者の援助を受ける子どもが食卓についた時間に開始し、食べ終わって食卓を離れるまでとし、観察者は、保育者の姿をビデオカメラで定点撮影をしながらフィールドメモを取った。●結果 担当制保育を3つの類型(①場所担当制②子ども担当制－グループ援助型③子ども担当制－個別援助型)に分け、その類型と1)食事場面における保育のプロセスの質2)保育者の集団的俊敏性3)食事場面における保育者と子どもの相互性のある関係性という3つのことからの深い関連性が示唆された。

乳児保育における先行研究レビュー

年	発表区分	タイトル・研究者	内 容
2020	保育学研究	1. 2 歳児の反抗・自己主張における養育者の対応と意識－多声的エスノグラフィーの手法を参照した語りの分析－ ○山田千愛、砂上史子	●目的 保育所等を利用せず家庭で1. 2歳児の子育てをしている家庭養育者と保育所の1. 2歳児保育を利用している保育所養育者の1. 2歳児の反抗・自己主張に対する対応と意識について明らかにする。●方法 多声的エスノグラフィーの手法を参照した映像視聴による集団討議の語りを分析。●結果 ①対応に関して、家庭養育者は「待つ」、保育所養育者は「交渉する」の語りの数が多い。②対応に影響を及ぼす要因に関して、家庭養育者は「時間」、保育所養育者は「時間」「精神的余裕」の語りの数が多い。③意識に関して、家庭養育者は「自己省察」、保育所養育者は「教育方針」の語りの数が多い。④映像視聴における否定的感情は両者に、肯定的感情は家庭養育者のみに見られることが明らかとなった。
2022	大阪総合保育大学児童保育論集	乳児保育における指導法－「相補的な関係」からの検討－ ○大方美香	●目的 子どもの生活活動・遊び活動における大人の関わり方の違いであること、「育てると育ちの融合」という視点から具体的な指導計画論を通して明らかにする。●方法 文献研究。●結果 大人は思わず乳児の微笑をみて微笑み、その微笑を見て乳児が笑いかける。以上のような相互作用が生まれることから、「相補的關係」を提案する。
2022	神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究	乳児クラス担当保育者は子どもの声・子どもの遊びをどう捉えているのか：子どもの主体的行動から子ども理解の視点を探る ○今村里香、佐藤智恵	●目的 乳児クラスを担当する保育者が、子どもの声をどのように聞き、子どもの遊びの姿をどう捉えているのかを明らかにする。●方法 1名の保育者の語りの分析。●結果 Bさんの子ども理解において（1）子どもを慈しむ感情、（2）活動そのものの面白さ、（3）保育形態の違い、（4）子どもの言動を支える自らの気づきという4つの視点が浮かび上がった。そこには対象者の「なんか楽しかった」という生々しい感情が存在していた。

5 「保育環境」に関する研究の視点（表3－5）

「保育環境」に関する研究の視点（表3－5）では、7件検索できた。

例えば、大内田（2017）は「乳幼児保育室の環境構成から保育を考える（1） プール学院研究紀要」、幸田、武田、吉次（2017）「遊びが充実するための環境のあり方②－小規模保育施設におけるすみっこ遊びの検討－第71回日本保育学会大会ポスター発表」、中道、砂上、

高橋、岩田（2022）「保育所における『環境設定の質』が1. 2歳児の社会情動的能力に及ぼす影響 保育学研究第60巻第1号」等といったように環境と保育の質に言及する内容に変化していつている。

保育所保育指針では、ヒトとして認める行動を育てる視点が不明確であり、具体的な内容が示されていない。また、ヒトとして認める行動を軸にした理論的枠組みを検討する必要がある。乳児の人権保育実践の視点と目標

表3－5：「保育環境」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	ノートルダム清心女子大学紀要	乳児期の遊び環境と保育者のかかわり：0歳児クラスの観察から ○伊藤美保子、西隆太郎、宗高弘子
2017	プール学院大学研究紀要	乳幼児保育室の環境構成から保育を考える（1） ○大内田真理
2017	第71回日本保育学会大会ポスター発表	遊びが充実するための環境のあり方②－小規模保育施設におけるすみっこ遊びの検討－ ○幸田瑞穂、武田俊昭、吉次豊見
2017	第71回日本保育学会大会ポスター発表	スウェーデンにおける乳児期の「学びの芽生え」を育む保育環境－新入園児 Inskolning（家庭から園生活への移行過程）から－ ○吉次豊見、幸田瑞穂
2018	福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学	乳児の好奇心を高める保育環境に関する一考察 ○黒木晶
2019	大阪キリスト教短期大学紀要	乳幼児保育室の環境構成から保育を考える（3）－クラスの環境構成時の実践知からクラス担任同士の共通理解を図る－ ○大内田真理
2022	保育学研究	保育所における「環境設定の質」が1－2歳児の社会情動的能力に及ぼす影響 ○中道圭人、砂上史子、高橋実里、岩田美保

は、今後、様々な議論を踏まえて整理されることが必要である。

6 「保育内容」に関する研究の視点（表3－6）

「保育内容」に関する研究の視点（表3－6）では、23件検索出来た。

例えば、平澤（2017）「保育所1歳児クラスの絵本場面における」乳児の意図伝達と『誘導的身振り』（3）－教示の場面に注目して－ 第71回日本保育学会大会口頭発表」、鎮、西村、土田、水枝谷「食事場面における担当制による保育者の援助と子どもの主体的関与（1）

（2） 第71回日本保育学会大会口頭発表」等、食事場面に関する発表が6件、小山（2017）「保育所における排泄のあり方について1 第71回大会日本保育学会大会ポスター発表」等、排泄に関する発表が5件、坂田（2017）「絵本に関する指導計画について－保育の場での絵本の役割と指導の要点 中国学園紀要」等、絵本に関する発表が4件であった。その他は、言語に関すること、身体表現に関すること等であり、乳児保育における「遊び」について言及した論文はみられなかった。3歳以上との大きな違いである。生活習慣への注目が乳児保育は高いことを示している。

表3－6：「保育内容」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	中国学園紀要	絵本に関する保育計画について－保育の場での絵本の役割と指導の要点－ ○坂田季穂
2017	福岡女学院大学 大学院紀要 発達教育学	保育に対する保育者の葛藤に関する研究動向：「身近な人と気持ちが通じ合う」と「人間関係」 「言葉」、「身近なものに関わり感性が育つ」と「環境」「表現」を中心に ○黒木晶、前田亜由美、坂田和子
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	身体を動かして遊ぶことの楽しさを子どもたちに－0.1.2歳の子どもとのかかわりと実態調査から見えてきたこと－（1）（2） ○光延保美、上村初美、上村沙織、日野多賀美、秋永眞理子、荒金順子、平川九十美、 畠中久代
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	表現遊びにおける身体性と造形性－乳児期の布との関わり－ ○松永益代、伊藤裕子、荒木みどり、井戸裕子、福田理恵、真鍋隆祐
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	保育所1歳児クラスの絵本場面における乳児の意図伝達と「誘導的身ぶり」（3）－教示の場面に注目して－ ○平澤順子
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	食事場面における担当制による保育者の援助と子どもの主体的関与（1）（2） ○鎮朋子、西村真美、土田珠紀、水枝谷奈央
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	食事場面のグループ担当制における保育者の援助の特性－保育所1.2歳児クラスに注目して－ ○土田珠紀
2017	第71回日本保育学会大会 ポスター発表	保育所における1.2歳児の排泄のあり方について1 ○小山朝子
2019	保育学研究第57巻	保育所1歳児クラスの絵本場面における保育者支援の役割－縦断的研究の分析を通して－ ○平澤順子
2019	埼玉学園大学紀要 人間学部篇	乳幼児期におけるコミュニケーションを重視した英語の指導法の一考察：保育園及び幼児英語教室の英語教育の実践を通して ○五十嵐淳子
2019	学苑・初等教育学科紀要	離乳期における保育者の援助特性に関する一考察－自食移行期の言語的調整と身体的調整に着目した事例的検討－ ○遠藤純子、小野友紀、池谷真梨子
2019	科学研究費助成事業 （基盤研究C）	乳幼児と養育者の応答的な相互交渉を高める音楽的心理教育プログラムの開発と効果検証 ○小池美知子
2019	第73回日本保育学会大会 口頭発表	乳児の絵本への興味・関心及び育ちと援助 ○高藻展代
2019	第73回日本保育学会大会 口頭発表	保育所における養護と教育を一体的に行う保育士の関わり－1歳児のオムツ交換場面に着目して－ ○木村重子
2019	第73回日本保育学会大会 ポスター発表	保育所における1.2歳児の排泄場面に関わる保育者の内面に起こる葛藤とその解決の過程について ○小山朝子
2020	清心女子大学紀要 人間生活	乳幼児期における食具の使い方に関する研究：0.1.2歳児クラスの保育におけるスプーンをめぐって ○伊藤美保子、西隆太郎、宗高弘子ら

乳児保育における先行研究レビュー

年	発表区分	タイトル・研究者
2020	浦和論叢	乳幼児の言葉の発達と保育者・養育者における「言葉」を育む援助 ○山梨みほ
2020	比治山大学短期大学部教職課程研究	乳幼児の造形表現における保育者の関わり ○久保田貴美子
2020	質的心理学研究	スプーン使用における乳幼児と保育者の身体的相互行為と食行為の形成 ○増山由香里
2021	日本社会福祉マネジメント学会誌	保育所における1、2歳児の排泄場面にかかわる保育者の迷いや困りとその解決の過程1歳後半児のオムツ交換を嫌がる場面に着目して ○小山朝子
2021	第75回日本保育学会大会口頭発表	2歳児クラスの散歩場面における言葉による相互行為の検討ー言葉の繰り返しに着目してー ○清水かおり
2021	第75回日本保育学会大会ポスター発表	0歳児の食事場面における心地よさの育みー特定の保育者による関わりを通してー ○川中義博
2022	日本社会福祉マネジメント学会誌	なぜ保育者としての私は乳児の排泄の自立を楽しむことができるのか？大人の固定観念を超えた「驚き」「発見」「喜び」 ○水野佳津子、中坪史典

7 「乳児保育」に関する研究の視点（表3-7）

「乳児保育」に関する研究の視点（表3-7）では、19件が検索出来た。

例えば、石川（2019）「乳児保育における現状と課題 保育者のアンケートを手掛かりに 兵庫大学短期大学部研究収録」、後藤（2019）「乳児保育における愛着をはぐくむ保育者の役割 瀬木学園紀要」、樋口（2021）「0、1歳児の気づきについての一考察ー一緒に過ごす相手への表出ー 第75回日本保育学会大会口頭発表」等、様々な視点から論考されている。

8 「保育思想」に関する研究の視点（表3-8）

「保育思想」に関する研究の視点（表3-8）では1

件が検索出来た。

例えば、浅田（2018）「保育における指導と援助の関係ー子どもの権利の視点からー 人間発達学研究」があげられる。

9 「発達論・児童文化」に関する研究の視点（表3-9）

「発達論・児童文化」に関する研究の視点（表3-9）では、6件が検索出来た。

野澤（2019）「保育の質と子どもの発達に関する縦断的研究ー質の保障・向上システムに向けて科学研究費（基盤研究S）」等といったアカデミックな学術的論文が散見される。

表3-7：「乳児保育」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	第71回日本保育学会大会口頭発表	乳児保育におけるアタッチメント（赤ちゃんへの対応は、特定の一人保育士？それとも特定の複数保育士？） ○小川勝利、小川明美、爾寛明
2017	第71回日本保育学会大会ポスター発表	乳児保育における意見表明権保障 ○浅田明日香
2018	名古屋柳城短期大学研究紀要	キリスト教保育のテキストに見られる乳児保育についての考察 ○柴田智世
2018	科学研修費助成事業（日本の研究）	社会的養護における乳幼児の愛着形成：養育者の愛着スタイルを考慮した援助法の模索 ○青木紀久代
2018	第72回日本保育学会大会ポスター発表	toddler期の子どもの仲間とのかかわりについて ○岡南愛梨
2018	第72回日本保育学会大会ポスター発表	乳児、3歳未満児における子ども同士の関わりー幼児期の姿をどのように導くのかー ○小川勝利
2019	兵庫大学短期大学部研究集録	乳児保育における現状と課題 保育者のアンケートを手がかりに ○石川恵美
2019	瀬木学園紀要	乳児保育における愛着を育む保育者の役割 ○後藤由美

年	発表区分	タイトル・研究者
2019	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	二人称的アプローチによる乳児期の仲間とのかかわりのはじまり ○岩田恵子
2019	第73回日本保育学会大会 口頭発表	担当制実施についての保育士の見解－アンケート自由記述からの考察－ ○西村真実、鎮朋子、土田珠紀
2019	第73回日本保育学会大会 ポスター発表	乳児保育の質に関する研究 ○大内田真理
2020	豊岡短期大学論集	幼稚園から移行した認定こども園における乳児保育の課題（Ⅲ） ○栗岡あけみ、多田琴子
2020	教職課程研究	乳児の最善の利益を考慮する専門職の視点：インクルーシブ保育に着目して ○保田恵莉
2020	第74回日本保育学会大会 ポスター発表	乳児保育における「安心感」尺度の検討 ○伊藤菜摘、寺菌さおり
2020	第74回日本保育学会大会 ポスター発表	3歳未満児の保育における担当制保育の実施に関する研究Ⅲ ○西村真実、鎮朋子、土田珠紀、水枝谷奈央
2020	第74回日本保育学会大会 ポスター発表	乳児保育における「緩やかな担当制」～保育者の語りから ○堀科、増田まゆみ、斎藤多江子
2021	同朋福祉	乳児保育の価値観の変容：「担当制・流れる日課」の実践に注目して ○神谷良恵
2021	第75回日本保育学会大会 口頭発表	0.1歳児の気づきについての一考察～一緒に過ごす相手への表出～ ○樋口陽子
2021	第75回日本保育学会大会 ポスター発表	新任保育者の実践に見る担当制保育の意義と課題－最初の6か月をたどる語りの分析より－ ○土田珠紀

表3－8：「保育思想」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2018	人間発達学研究	保育における指導と援助の関係－子どもの権利の視点から ○浅田明日香

表3－9：「発達論・児童文化」に関する研究の視点

年	発表区分	タイトル・研究者
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	発達の連続性をふまえた保育をめざして（2） ○水野恭子、大岩みちの、鈴木方子
2017	第71回日本保育学会大会 口頭発表	2歳児クラスから3歳児クラスへの移行－発達から保育内容・保育方法の接続を考える－ ○斎藤多江子、増田まゆみ
2018	同朋福祉	乳児期における発達の道筋と遊びの環境 ○富山幹子、鬼頭弥生
2018	第72回日本保育学会大会 ポスター発表	子どもの発達や個人差に寄り添う保育を探る－1.2歳児の食事場面を通して－ ○岩田尚子、太田茂子、小沢志江子
2019	科学研究費助成事業 (基盤研究S)	保育の質と子どもの発達に関する縦断的研究－質の保障・向上システムの構築に向けて ○野澤祥子
2022	総合福祉科学研究	乳幼児の援助要請行動に関する発達の検討 ○西元直美

今回は保育系の論文を抽出したが、乳児保育においては、心理学的視点からの発表や実験系の発表も急激に増えており、今後はその領域と保育実践との融合が検討されなければならないと考える。

おわりに

2017年から2022年までの乳児保育に関する研究の中

で、題名・研究内容・発表者の観点から、乳児保育研究に関連する論文を選定し、傾向や特徴を精査した。乳児保育の指導法に関連する重要テーマについて継続的傾向を分析した。年度別分析では、初期は乳児保育の制度に関する議論が中心であり、中期以降は教育・保育計画や保育内容等が多く取り上げられたことが明らかとなった。乳児保育の指導法に関する分析では、継続研究や保育者の関りや課題をテーマにしたものが多かった。乳児

保育の指導計画では、課題を焦点化し分析していこうとする流れとどの保育施設にもあてはまる課題を取り上げる流れとが見られた。保育者の資質能力は、偏りなく取り上げられており、乳児保育の研究においては欠かせないテーマであることが示された。

乳児保育の「保育内容のカリキュラム編成」は、実践として子どもの成長の断面をとらえつつ、その成長の原動力をとらえ、どのように保育者が働きかけるのかを理解しておく必要がある。しかし、実践的に言えば、「子どもは保育所での生活があり、その中でいろいろな活動があり、保育が行われる」と考えれば、「乳児がどのような生活を送ることが望ましいのか」、そして、「生活の中での保育はどうあるべきか」を考えることが重要である。乳児保育の実践では、保育内容の編成の原理を軸とし、「①子ども理解の方法 ②目標・ねらいの立て方 ③内容（活動）編成 ④働きかけ ⑤評価」5点が考えられる。スコープとして活動の領域を想定するのか、発達の領域を想定するのかが保育内容のカリキュラム編成における課題である。子どもの成長をどのような視点や内容からとらえるのか、「子どもの活動から発達領域からか」という課題を5つの基準を用いて検討する。特に活動やねらい、保育者の働きかけについて重要であるが、先行研究から言及した研究は散見できなかった。この意味において、研究者の行っている発達研究は部分的であり、子どもの全体像をとらえていない場合も少なくない。その手がかりとなるものは、山下らの基本的生活習慣論であり、ボウルビイの愛着関係論である（ここでは、その詳細な検討は行わない）。

しかしながら、乳児保育の実践構造は、「何を育てる時期なのか」、「保育者はどのような働きかけが必要なのか」という課題意識に基づいて「どのような視点（ねらい）から乳児保育を行えばよいのか」を整理する必要がある、本研究の目的・課題といえる。

文献

- 阿部和子 2007 演習 乳児保育の基本 萌文書林
- 阿部和子、大場幸夫 2002 乳児保育 ミネルヴァ書房
- 阿部和子ほか 2009 乳児保育：子どもの豊かな育ちを求めて 萌文書林
- 遠藤利彦 2013 情の理論：情動の合理性をめぐる心理学的考究 東京大学出版会
- 遠藤利彦 2012 甘えとアタッチメント－理論と臨床実践－ 遠見書房
- 福岡貞子、磯沢淳子 2007 乳児の絵本の読み聞かせに関する一考察（その2）保育士養成校における乳児保育の授業内容を中心に 大阪青山短期大学研究紀要 32号 大阪青山短期大学
- 福沢周亮監修 2012 保育の心理学－子どもの心身の発達と保育実践－ 教育出版
- 船越利代子 2010 “乳児保育”授業における課題：保育所実習アンケート分析から つくば国際短期大学紀要 3号 つくば国際短期大学
- 古橋紗人子、安井恵子 2012 乳児保育の授業研究（1）予習重視のグループ討議と講義内容 滋賀短期大学研究紀要 37号 滋賀短期大学
- 乾敏郎 2013 脳科学からみる子どもの心の育ち：認知発達のルーツをさぐる ミネルヴァ書房
- 梶美保、神崎みち代、松生泰子、恵村洋子、豊田和子 2003 乳児保育の質的向上をめざして（2）：乳児期の保育内容食の援助について考える 日本保育学会大会発表論文集（56） 日本保育学会
- 梶美保、豊田和子 2007 食援助のプログラム開発と実践 乳児保育の質的向上をめざして 高田短期大学紀要（25） 高田短期大学
- 金田利子 1980 乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐってⅣ－保育の構造と子どもの発達－日本教育心理学会における研究委員会企画シンポジウム 日本教育心理学会「発達」8号 日本教育心理学会
- 金田利子 1984 乳児保育に関する発達研究の理論と方法をめぐって〔Ⅳ〕 教育心理学年報 23
- 金田利子、諏訪きぬ、土方弘子 2000 『保育の質』の探究 ミネルヴァ書房
- 柏女霊峰 2008 子どもの権利を保障するための視点－子ども家庭福祉の再構築期を迎えて（特集 子どもの権利を守る） 月間福祉 91号（1）
- 加藤敏子、富永由佳 2011 乳児保育：一人一人を大切に 萌文書林
- 小西行郎 2009 子育ての神話 発達神経医の立場から 心理学ワールド 46号
- 小西行郎 2009 赤ちゃんのしぐさで気持ちがわかる本－ふしぎな動作・よくある行動には意味がある！ 株式会社 PHP 研究所
- 小西行郎、遠藤利彦 2012 赤ちゃん学を学ぶ人のために 世界思想社
- 小西行郎 2013 はじまりは赤ちゃんから「ちょい待ち育児」のススメ 赤ちゃんとママ社
- 厚生労働省 2018 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- 黒岩英子、青山優子 2004 乳児保育所1－2歳児運動遊びの実践と保育者の援助 西南女学院短期大学研究紀要 50号 西南女学院短期大学
- 松生泰子、神崎みち代、恵村洋子他 2004 乳児保育の質的向上をめざして（4）：食援助の実践改善 日本保育学会大会発表論文集 57号 日本保育学会
- 松生泰子、佐田恵子、恵村洋子他 2007 食の意識調査と“食援助プログラム”に基づく実践改善：乳児保育の質的向上をめざして 保育学研究 45号（2） 日本保育学会
- 松本寿通 1997 乳児保育（平成7年度幼児保健講習会）日本医師会雑誌 116号（5） 日本医師会
- 松本美紀 2008 自分の思いをありのままに！！1.2歳児の実践（特集第47回全国保研・岐阜集案） 季刊保育

- 問題研究 230号 全国保育問題研究協議会
28. 光本弥生 2000 「保育構造論」についての一考察 教育学研究紀要 46号 (1:626-631) 中国四国教育学会
 29. 三好年江、石橋由美 2005 授業「乳児保育Ⅱ」の模擬保育から学生が学んだこと 新見公立短期大学紀要 26号 新見公立短期大学
 30. 三好年江、石橋由美 2006 初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識 新見公立短期大学紀要 27号 新見公立短期大学
 31. 無藤隆、高橋恵子、田島信元編 1990 発達心理学入門Ⅰ－乳児・幼児・児童－ 東京大学出版会
 32. 村山貞雄 1986 乳児保育 学術図書出版社
 33. 森上史朗 1988 よりよい実践研究のために 別冊発達7号 ミネルヴァ書房
 34. 森田健宏、井上千晶 2009 乳児保育担当保育士の資質と養成機関の課題 乳児保育担当への不安と「学・職」連携教育による充実 夙川学院短期大学教育実践研究紀要2号 夙川学院短期大学
 35. 西村真美 2010 「乳児保育」授業内容についてのテキスト項目の検討 大阪成蹊短期大学研究紀要7号 大阪成蹊短期大学
 36. 大方美香、小寺玲音、玉置哲淳 2013 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その1－ 大阪総合保育大学紀要第7号 大阪総合保育大学
 37. 大方美香 2016 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その2－ 大阪総合保育大学紀要第10号 大阪総合保育大学
 38. 大方美香 2017 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その3－ 大阪総合保育大学紀要第11号 大阪総合保育大学
 39. 大方美香 2018 乳児保育のカリキュラム編成の研究 ふくろう出版
 40. 塩川寿平、小林友子、野々目桂三ほか 1997 心を表現する幼児画の理論と実践について 日本保育学会大会研究論文集 (50) 日本保育学会
 41. 榊原洋一 2006 今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て支援 ミネルヴァ書房
 42. 穴戸健夫 2010 保育カリキュラム (保育課程) について考える－保育カリキュラムの構想－ 保育の研究 23号
 43. 玉置哲淳 2002 新版幼児教育課程論入門 建白社
 44. 玉置哲淳 2008 指導計画の考え方とその編成方法 北大路書房
 45. 玉置哲淳 2010a 乳児の人権保育実践展開の視点と目標 エデュケア (30) 大阪教育大学
 46. 玉置哲淳 2010b 乳児の人権保育シリーズ1 2歳児の人権保育 解放出版社
 47. 田中亨胤 1984 経験活動の視点から見た教育内容の変遷について (我が国の場合) 兵庫教育大学幼児教育カリキュラムの研究 兵庫教育大学
 48. 田中亨胤 1994 幼児教育カリキュラムの研究 日本教育研究センター
 49. 田中亨胤 2010 幼児教育カリキュラム・シフトの位相とパラダイム－教授－学習過程の可視化への試み－ 京都文教短期大学研究紀要 49号 京都文教短期大学
 50. 田代泰子 1985 実践記録 (1歳児保育) の分析から:「乳児保育」に関する発達研究の理論と方法をめぐって (V): 保育園における保育者と子どもの関係: 自主シンポジウム教育心理学年報 24号 教育心理学会
 51. 田中敏明、金丸智美、永瀬美香子 2012 保育雑誌に掲載される年間指導計画モデルの分析と評価 教育実践研究 20号
 52. 田中未来、久世妙子 1981 乳児保育 福村出版
 53. 土方弘子 2000 保育所保育指針と乳児保育実践の課題 (特集 保育指針改定を考える) 保育の研究 17号
 54. 上村眞生、七木田敦 2008 保育士のサポート源構造に関する実証的研究 小児保健研究 67号 (6) 小児保健研究会
 55. 横松友義、浅野泰昌、近行あさみ他 2007 これからの保育構造論構築に関する一考察 岡山大学教育学部研究集録第136号 岡山大学

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

